

本永先生が地域医療貢献奨励賞を受賞されて

沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 岸本 信三(沖縄県)

平成二十二年二月財団法人住友生命社会福祉事業団による「地域医療貢献奨励賞」が発表され、当県の先輩である本永英治先生が受賞されたことを大変嬉しく思います。この賞は、今回第三回目なのですが、一期先輩である本永医師が受賞され、賞の存在を初めて知ることとなりました。この賞は、「自治医科大学を卒業し義務年限終了後も、離島、過疎地域、山村地域、特別豪雪地域に位置する医療機関又は地域医療を支援する部門において通算五年以上勤務し、かつ現に勤務している満四十歳以上の医師」又は「都道府県から特別に推薦があった医師」が対象とされています。今回は、推薦された

二十九名のうちから六名の方が受賞され、その一人に本永英治先生が選ばれたのです。

先生には、良き思い出が多くあります。学生のころ、寮の先生の部屋におしにかけては、深夜まで悩みを聞いていただいたり、「桃太郎」の昔話を先生のふるさと宮古島のことばで語ると、実に新鮮な物語に変身し、そのユーモアたっぷりなお話は秀逸であったことを鮮明に覚えています。大学卒業後、昼夜の区切りのなかった県立中部病院の研修医時代、深夜の仕事を終えると、先生の車でドライブをしながら中の町(歓楽街)に繰り出しては、おいしいものをこちそうになつたりしていました。

中部病院の研修後、先生は、伊是名島、西表島などの離島を勤務されました。先生はその過去を振り返られたとき、離島から多くのことを学んだと話されています。

「当時、若造だった私でさえも、そこに住む人々にとっては唯一の頼みだった。」医師の出発点が離島であったことを、NEGATIVEに考えがちな多くの意見と異なり、むしろ離島がより良い医師を作りだす素地があることを多くの若き医師に教えてくれる言葉とします。我々が勤務した当時の離島は、天候が荒れると沖縄本島から隔絶され、新聞はもちろん、生活必需品も滞る状況がしばしばでした。巨額を投じて導入された離島遠隔画像システムは当初大いに期待されたのですが、実際には診療所で撮影したX線が、そこではすぐに骨折、と分かるような画像でも本島の病院では、よく分からないとされたり、搬送に時間を要するため途中で電話回線が切断されてしまうことが続き、結局現場では有用ではありませんでした。現在のように情報通信網が発達し、各離島診療所にもインターネットが常備さ

れ、世界のできごとや新しい文献が容易に迅速に手に入るようになるとともに、デジカメを利用した鮮明な画像も本島に送ることができるようとなったことは、本当に素晴らしいことです。

さて、戦後の沖縄の離島診療所では、診療は外国人医師や医介補などによっていましたが、自治医大設立後は自治医大卒業生が勤務し、医療が継続されるようになりました。一方、へき地中核病院である県立八重山病院や宮古病院、また、久米島病院では医師確保に困難を伴っているのが現状です。県立中部病院や琉球大学を中心に、当院からも応援医師が派遣されていますが、余裕のある定数配置でなく、当院の診療を制限しながらの対応となっています。もっと余裕のある人員確保が可能となれば、離島医療のサポートも継続的に安定的に可能となることです。関係者が英知を集め、この離島医療の問題に取り組むことに今後も協力していきたいと考えています。